

人間に生まれて "つながりを生きよう" 311

難思の弘誓は難度海を度する大船

私の思いはかれない誓いは、

渡りがたい海を渡らせる。

阿弥陀の慈悲が声となる大きな船に乗る。

『教行信証 総序』

北陸地方の梅雨入りは、昨年と同じ六月十一日でした。最近の雨の降りようは、急に大きな雨になり、災害になることがしばしばありますので注意が必要です。

また今年は熊の出没が多く見られました。草丈も高く見つけにくくなってきています。少数で山方面に行くときは鈴や熊スプレーなどをもっていきましよう。

六月二十一日は夏至でし

た。一年のサイクルも、はや、半分になります。調べてみましたが、夏至といっても、六月二十一日は昼の時間が一年で最も長く十四時間半ですが、日の出の時間が最も早いのは六月十四日午前四時三十六分、日の入りが最も遅いのは六月三十日十九時八分で、夏至の日ではありませんでした。「夜は七時を過ぎててもまだ明るい」と話しています。近頃は曇りの日が多いのですが、それでもまだ明るいですね。

7月真敬寺行事予定

- 2日(日) 日曜学校 午前9時
真宗教室 2 午後2時
お経の伝承から浄土真宗
- 10日(月) 正信偈の会 午後1時半
同朋新聞拝読
- 17日(月) 井波別院巡回法座 午前9時半午後1時半
講師 長谷顕文 さん
- 28日(金) 暁天講座 早朝5時
講師 立野 寿さん

六月の日曜学校は校内の自転車点検のため十一日に変更しました。正信偈の会はいつものメンバーで話し合い、真宗入門講座には若いご婦人方が参加され、熱心に聞き入っておられました。

二十三日二十四日は祠堂経会、初日の追悼会にも二十名ほどの参詣がありました。富山市小矢部市砺波市からも法話を聞きに来ていただきました。

祠堂経会の聞書

立教開宗の意義

「総序」を読み解く

瓜生 崇(うりゆうたかし)さん
滋賀県大津市玄照寺住職



『教行信証』の総序(赤本82頁)にある「難思の弘誓」について、思い難いのは、自分の考えや自分の思いの延長線上にあるのでは無い我々を超えた広い誓いの世界のことなんです。

我々のもっている思いや、考え、願いは自分の思い通りにもならないし本当の願いなのかと問われても、実は答えられないのです。そういう「思い」を破るのが難思の弘い誓いです。

龍樹菩薩は大変賢い方でしたが、その方が「自分は覚りの世界に入っていくことはできない。けれども、覚りの世界は言葉になって私にとどいてい」ということにハッと気づかれました。

仏さまが、一度(智慧を)覚ったら、覚っていない迷っている人を見捨てることは出来ないのです(これを慈悲といえます)。

仏像に三尊像という形があります。真ん中に阿弥陀さま、右側に勢至菩薩、左側に観音菩薩がおられます。勢至は智慧をあらわし、観音は慈悲をあらわしています。阿弥陀仏を表

現するのに、智慧を覚り、慈悲をもって人々を救う姿がこの三尊像です。すなわち、仏さまが一度智慧を覚ったら、ご自分が覚ったことには止まらず、あらゆる人の迷いや苦しみを救う慈悲となるということであらわしているのです。覚られた仏さまが再びわれわれの迷いの世界に入って、迷っているものを救ってくださっているのです。

仏さまは覚りの世界に閉じ籠もたりにしないのです。

私たちは、「死んだら極楽浄土に行く」と思っているでしょう。ところがその極楽浄土は自分の住処にはできないのです。「無住処涅槃」(覚りの世界は自分の住所にはできない)と書いてあります。どついついことかと言いますと、浄土とは、そこに生まれて楽をする世界ではないのです。

浄土というのは、私が覚っていく世界です、私を覚らせる働きのことを言います。その浄土に生まれるとは、

仏の覚りを得ることですから、仏として苦しんでいるものをほっておけなくなるのです。仏にとって苦しみは全部自分のことになり、他人事にはできなくなるからです。すなわち、一度浄土に生まれたものは、必ず浄土の命を捨てて迷いの世界に帰ってくるのです。これが私たちが救われるあかしなんです。そのように親鸞聖人も『教行信証』に書かれています。

ですから、お葬式などで、「今もお浄土から見守ってくれています」というのは間違いです、浄土から見守っているというような、そんな他人行儀なものではないのです。お経には、お浄土には「おふとん」が無いと書かれています。浄土はそこで休めるところで

はないんです。必ずそこから迷いの世界に働きかけてくるはずですよ。

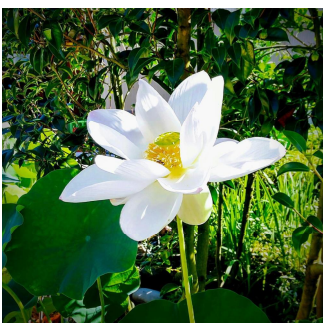
龍樹菩薩は、「真実の覚りの世界からは、仏は必ず言葉となって働きかけている」ということを教えておられます。それは、仏さまが言葉となって私に届き、その仏さまの名前を聞いて、私が自分の心で思うて救われていく、私に目覚めさせてくださる道というのがあるんです。

我々が自ら覚りを求めようとしても難しい。それは三千世界を持ち上げるほどの「難行道」(行うのが難しい道)です。それに対して、仏さまの名を聞いていく道は、「易行道」(行い易い道)だと龍樹は教えてくださいます。これは、それまでの仏教からすると大転換だったんです。

私たちに働きかけてくださる仏の名は、もう、おわかりでしょう。「南無

阿弥陀仏」ですね。龍樹菩薩は仏の名を「南無阿弥陀仏」とは明記していませんのですけれども、後世の方がこれは「南無阿弥陀仏」のことだと気づいたんです。

「難思の弘誓は難度海を度する大船」の「大船」はこのことなんです。親鸞聖人は仏の名によってすぐわれていくことを「船」にたとえているのです。船に乗ったら船頭まかせです。自分で渡っていくのはとっても難しいことを海にたとえられ難度海、そこをわたすのが大船すなわち「南無阿弥陀仏」です。私の力ですぐわれていくのではなく、仏さまが「どうあってもすぐわずにおれない」という大きな慈



悲に私をまかせていく道なのです。

覚りの世界から言葉となって私のところに届いている、このことを、私たちは阿弥陀さんが「南無阿弥陀仏」の声となつて、私をずっと呼び続けている、ととらえます。そして私を呼ぶ「南無阿弥陀仏」の声に耳をすまして聞いていくところに「大船」に乗る、易行道の道があることを龍樹は教えてくださっているのです。

法話はQRコードを読み取って下さったらYou Tubeで見られます。

皆様のご感想を聞かせていただければと思います。



これまでのご法話は下の真敬寺ホームページからご覧ください。

7月聞法は

17日(月) 井波別院巡回法座

講師は長谷頭文さんです。

『教行信証』についてお話をさせていただきます。

長谷頭文(はせあきふみ)さんプロフィール

真宗大谷派万徳寺衆徒。
富山県射水市生まれ。バンタンデザイン研究所ファッション学部卒業後、株式会社メンズニューヨーク(現ダイドーフワード)に5年間勤務。大谷専修学院修了後、真宗大谷派高岡教務所事務嘱託、真宗本廟同朋会館補導を経て、現在。
(『悲しみを聞く人』サンガ伝道叢書 より)

お寺はどなたでも来ていただけるところです。

お誘いあわせてご聴聞ください。

祠堂経は今年も多くの方にお参りいただき、無事つとめることができました。初日のお話の最中に白猫が、二日目にはツバメがお堂の中に入ってきて、この子たちも聴聞に来たのかな、と、少しほっこりした気持ちになりました。

いろいろな講師の方から今年の真敬寺の法話テーマである『教行信証』総序のお話を伺っていると、講師の方によってそれぞれの内容をそれぞれの話し方でお話されて興味深いです。聞きたびごとに新しい気づきをいただいています。

南無阿弥陀仏

(坊守より)



発行 〒939-1664富山県南砺市竹内440

真宗大谷派(東) 小塚山真敬寺 宮地修

0763-52-0196 携帯電話090-3760-5692

ホームページを開設しました